

鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,37 2021年 新年号



鳥海イヌワシみらい館
マスコットキャラクター
「ワシーくん」



バードウォッチングへの誘い③ 「今どきの猛禽類」
蜂蜜の森から①⑥ 「大聖堂とミツバチとカヌレ」
「ミヤマシトド」10月酒田市 撮影：とし様

今どきの猛禽類

近代化によるテクノロジーの発展は、私たち人間の暮らしを劇的に変化させました。一方で、テクノロジーの発展には無縁に考えられる野生動物たちも、私たちの知らないところで急激にライフスタイルが変化しています。今回は猛禽類たちが現代でどのようにして人と共存しているかを紹介します。良くも悪くも、環境と野生動物、そして私たちの活動について考えるきっかけとなればと思います。

フランス軍では、対ドローン用としてイヌワシを訓練している。
(AFP通信2017年)



中央アジアの鷹匠 (佐藤淳志氏提供)

カラスの増加により、ツミは大きななわばりを防衛することが難しくなり、必要最小限のなわばり防衛しかなくなりました。その結果、ツミたちに守ってもらっていたオナガは、ツミのなわばり周辺で繁殖することが少なくなった。(植田2006)

おっ！ニニまで来ても
ツミリーダーが反応しないようだ！

マイ
ネスト(巣)
ファースト！

オナガがカラスにあそわれれば、ツミはオナガを守るが、ツミがカラスにあそわれても、オナガはツミを守るギムはない。カラスはそれを、見ていることだけで、ツミは驚つく/いなのか...

ツミの傘の下は安全だったはずなのに！もうニニから出ていくしかない！

※ツミはオナガを意図的に守っているわけではありません。



ツミがダメならトビでもいいや？トビの周辺でたわむれるオナガ。(撮影地:宮城県)

都市部で暮らすハヤブサが急増している原因は、巣材を必要としないハヤブサの習性と、公園に生息するハトによって成り立っている。



人工建造物で抱卵するハヤブサ (撮影地:山形県)

4

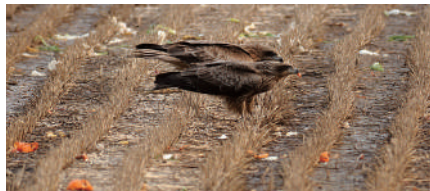
海 洋ゴミ問題は海だけでなく陸の生物にも影響する。ゴミとなったゾウさんジョウロを捕獲し飛行するミサゴが目撃されているとか……?



風の抵抗を考えて、しっかり捕獲した獲物を前向きでつかみ飛行する。(撮影地:山形県)

5

観 光地では、野生動物へのエサやりによる「人慣れ」が問題となっているが、神奈川県茅ヶ崎海岸では海岸で食事をとると「鷲に油揚げをさらわれる」故事が実体験できる。



猛禽類の定義は「肉食」であること。写真のトビは残飯のミカンを食べている。(撮影地:山形県)

6

オ オタカは生息個体数の増加によって、本来のなわばりから都市部へと生息領域が拡大。都市公園でも目撃されるようになった。



都会では人工的な都市公園でも、オオタカが住んでいる可能性がある。(撮影地:山形県)

7

人 による調査技術の向上によって、これまでつがい関係を解消しないとされていたクマタカが、前年までとは別の個体と繁殖したことが確認された。(東奥日報 2010年1月29日)



仲睦まじく飛翔するクマタカのパア (撮影地:山形県)

庄内の動物情報コーナー

12月に入っても降雪があまり多くない状況だったので、今年は多くないかとタカをくっ付けておりましたところ、年末寒波襲来から大雪になり、雪の捨て場もないほどに。強風で施設の壁も剥がれたりして、夏に発生したラニーニャ現象の予報は当たるのだなと実感しています。各地の自然情報をmoukin@raptor-c.comまでお寄せください。1月～3月に観察できた動植物をお待ちしております。



2020/10/2 「コウノトリ」 酒田市
9月に3羽でやってきたコウノトリたちは約1か月の間庄内地方に滞在してくれました。稲刈りの風景と非常にマッチしていますね。全国でこんな様子が見られるようになることを願っています。撮影：小池侑多様



2020/10/24 「ジョウビタキ」酒田市
家の庭にやってきたロマンスグレーの冬鳥。植栽された花との相性の良さは、古来より花鳥図にもされています。撮影：佐原様



2020/11/23 「オオコノハズク」 酒田市
酒田市の離島飛鳥は、今秋多くの渡り鳥で賑わったそうです。薄暗い歩道を歩いていると落ちていた1羽のフクロウと遭遇。「おっと！ みつかっちゃいましたか。」撮影：とし様



2020/11/24 「ノスリ×2」 鶴岡市
道路の真ん中で2羽のノスリがもつれていました。脚がからまり「お前が悪いじゃ！」と押し問答している模様。しばらくしてから解放され、お互い別の方向へ飛び去っていきました。撮影：本間憲一



2020/12/4 「ホンドタヌキ」 鶴岡市
熟して落ちた庄内柿を食べていたタヌキに遭遇。ダニによる動物疥癬症にかかっているようで、冬を前にして体毛が少なくなっています。冬將軍に負けるなよ！撮影：本間憲一



2020/12/26 「ハヤブサ」 鶴岡市
高層建築物に止まる猛禽類。最近、都市部でも観察されるハヤブサは、人工物にもよく営巣して、人々を驚かせています。撮影：クノ様

全国の動物情報コーナー



2020/10/22 「カケス」 山形県高島町
雨覆いの水色の羽が印象的な鳥ですが、とても頭がよくて、森の中で鳴きまねをしています。さすがカラスの仲間。だまされた人も多いのではないのでしょうか。カケス詐欺。新しい鳥類の名前になりそう。撮影：菅様



2020/11/12 「クマタカ」 秋田県
山里の集落で空を見上げると、飛んでいた大型の猛禽類。翼の斑が森の王者であることを示しています。撮影：たっちゃん様



2020/11/21 「ハイタカ」 神奈川県
ハイタカ属にはいつも悩まされますね。まして雌雄の判別はかなり困難を極めます。オオタカと並んで昔から鷹狩に使われた猛禽類です。撮影：こまたん金子様

イベント開催報告

○「イヌワシ絵画コンクール作品展」

鳥海イヌワシみらい館の開館20周年を記念して、全国より猛禽類の絵画作品を募集し、集まった全作品約200点を、7月下旬～10月中旬までの期間、「酒田市文化センター」、「鳥海イヌワシみらい館」、鶴岡市の商業施設「エス・モール」の庄内地域3会場を巡回して展示を行いました。

各会場多くの来場があり、展示された絵画を見て、「すごい上手！」「丁寧な塗り方だね。」などと、作品のタッチや、同世代の作品について興味深く鑑賞してくれました。応募してくれた子供の家族で来場し、展示されている自分の絵画と並んで記念撮影をしたりして楽しんでくれたようです。

鳥海イヌワシみらい館に来場してくれた人には、20周年記念品も配布しました。

作品を応募してくれた皆さん、鑑賞に来てくれた皆さん、展示に協力していただいた皆さんありがとうございました。



○観察会「チュウヒとハクチョウのねぐら入りを見よう！」

11月14日(土)観察会「チュウヒと白鳥のねぐら入りを見よう！」を開催しました。講師としてワイルドライフリサーチの鶴野レイナさんよりご案内いただきました。

最上川河口はガンカモ・ハクチョウ類の多く利用する場所で、国指定の鳥獣保護区となっています。日中の時間帯は、水田で採食していたため、ハクチョウたちは河口部にほとんどいませんでしたが、時間が夕刻に迫ってくるにつれ、一家族、また一家族と少しずつスワンパークを目指してねぐら入りをしていくところを観察することができました。絶滅が心配されている希少猛禽類のチュウヒも、ちょうど中継地として最上川のスキ原を利用している模様で、何度か姿を見せてくれました。

山形県の母なる川「最上川」河口部には、スキやヨシの生育する環境が残されており、そこを希少な鳥類たちが利用しているということを、参加者には観察を通して知っていただくことができました。講師の鶴野レイナさん、参加してくれた皆さん、協力いただいたスタッフの皆さんありがとうございました。

この日見られた鳥:チュウヒ、トビ、ノスリ、ミサゴ、コハクチョウ、マガモ、コガモ、オナガガモ、カルガモ、カワウ、ハシビロガモ、オオバン、カンムリカイツブリ、カイツブリ、ヒシクイ、アオサギ、ダイサギ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キセキレイ、ハクセキレイ、カラヒワ、ヒヨドリ、ムクドリ、ジョウビタキ、ツグミ、ウミネコ、レースバト 計28種



○「西荒瀬保育園ハクチョウ観察会」

11月19日(木)酒田市の西荒瀬保育園で、観察会を開催しました。みんなで酒田市内の水田に行き、約100羽のコハクチョウたちが庄内平野の美味しい落穂を食べているところを観察してから、水鳥たちが多く集まる最上川スワンパークへ行き、ハクチョウのほかカモ、タカたちを観察しました。

「黒い鳥がいる！」「顔が緑色！」などと興奮した様子で双眼鏡をのぞいていました。自然を観察することは、なにも山や森の中でなければできないことではありません。普段私たちが生活している身近な環境にも意識を向けてほしいと思います。西荒瀬保育園の皆さんありがとうございました。





蜂蜜の森から 第16回「大聖堂とミツバチとカヌレ」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して、自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムのコーナー第16回目です。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？



教会で使われている蜜ろうそく
(大島元村教会・東京都)



2019年に焼失してしまった
パリの世界遺産ノートルダム大聖堂



卵黄と蜜ろうで作る「カヌレ」

2019年にパリのノートルダム大聖堂が火災に遭いましたが、屋上で飼育されていた3群のミツバチは奇跡的に助かりました。

教会でミツバチ？と驚かれるかもしれませんが、実はキリスト教では、祭壇に神聖とされるミツバチの巣で作る蜜ろうそくを灯すために、修道院などで養蜂が盛んに行われていたのです。私の工房にもクリスマス前には全国の教会から注文をいただいて大忙しになります。

ところで、昔のフランスではお菓子も修道院が専門に作っていました。ワインで有名なボルドー地方の修道院では18世紀に日本でも人気のお菓子「カヌレ」が作られました。私も大好きなお菓子です。ボルドーでは、オリ※を沈めて澄んだワインを作るために卵白が大量に使われました。ですから卵黄が大量に余っていたのです。

そしてカヌレを作るには蜜ろうも必要でした。カヌレをかじった時の独特なカリカリ感は型に塗られた蜜ろうがもたらしたもののようです。ワイン生産と修道院の養蜂があればこそ生み出されたお菓子がカヌレだったのです。

残念なことに、日本では扱いつらい蜜ろうの代わりにバターを使う店が多くなってしまいました。しかし、山形市の予約制の菓子店「Hinemosu」では、うちの蜜ろうを使って焼いてくださっています。またこのお店では、小麦が苦手なお客様のために、オーダーすれば米粉でグルテンフリーのカヌレも焼いてくださいます。ぜひ18世紀のフランスの味を堪能なさってみてください。

※「オリ(澱)・・・ワインの中の浮遊物や沈殿物(タンパク質)のこと。タンパク質の多い卵白と結合させ、沈殿したものを取り除くことで澄んだワインになります。



安藤竜二 (あんど う りゅうじ)
1964年生まれ。養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうソック製造に着手。ハチ蜜の森キャンドル代表。NPO法人朝日町エコミュージアム協会副理事長。アシナガバチ畑移住プロジェクト主宰。近著『手作りを楽しむ蜜ろう入門』(農文協)・編著『朝日岳山麓養蜂の営み』(朝日町エコミュージアム研究会発行)



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

普及啓発担当

ラニーニャ現象が起こったという話は聞いていたので、準備は万全でしたが、予想の一段上を行く大雪に悪戦苦闘しております。(本)

事務局

大雪で犬の散歩に四苦八苦。「ほでわら(雪原)」で私は足がもつれ、愛犬は泳いでいるよう。(後)

希少種保護増殖等専門員

昨年末、「工匠の技」として伝統建築を守る技術がユネスコの無形文化遺産の登録！茅葺や茅採集も含まれていることに感動しました！(長)

鳥海南麓自然保護官

子供が楽しめる新たな展示物が追加されましたので、雪が落ち着いたら遊びに来てください。(澤)

編集後記&施設情報 鳥海イヌワシみらい館 1月～3月の開館情報

開館時間・・・9:00～16:30

入館料・・・無料

休館日・・・1月・2月は毎週火、土、日、祝。3月は毎週火

臨時休館日はホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス : <http://www.raptor-c.com/>

<https://www.facebook.com/Raptoreagleraptor>

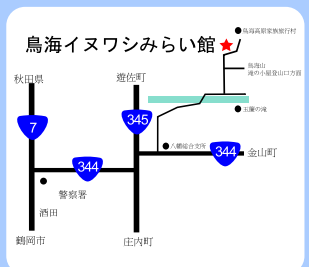
猛禽類保護センター

〒999-8207

山形県酒田市草津湯ノ台71-1

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: moukin@raptor-c.com



鳥海イヌワシみらい館通信
Vol.37 新年号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)